

# 北毛俳壇の展開と月次句合(下)

——左部家旧蔵資料の語るもの(その3)——

加藤 定彦

## 六 化政期の北毛俳壇

### ① 白兔園系の進出——露慶・以足

筆者資料のなかに、露慶編『もとの道』(寛政頃刊)がある。例によって保存状態が良好で、「露慶記行／もとの道／東雲屋雞六藏板」と摺り、左肩に「其雲様」との付箋が貼られた袋が付いていて、左部家旧蔵本と判明する。前半は編者の松島までの紀行で、途中、本宮の冥々、白石の乙二、仙台の巢居・白夜と風交、帰りは出羽越えして山寺に詣で、象潟を見た後、酒田の長翠を訪ね、伊達・信夫の古道に出、白河を通過、郡山の露秀を訪ね、那須野を経て赤城山を越えるところで終わる極めて大雑把な紀行文で、その間、交流のあった俳士や東都ほかの諸家近詠を付録する。東都の牛門庵<sup>うづもんあん</sup>以足に跋をもとめ、翌年の上洛土産として上梓したものという。巻軸近くに掲載される「大根引あかしの海は春めきぬ 成美」が、石川真弘編『夏目成美全集』(和泉書院、昭和五十八年)所収の「成美発句集」には文化二年(一八五五)のところに

収められているので、その頃の成立であろう。その一冊を贈られた其雲も、

牧くれて花野、すゑのけぶり哉

ト々庵其雲

など2句が入集、それ以外にもひろく沼田近郊の作者の句が見え、編者露慶は北毛に縁の深い人物と推察される。

その後入手した露慶の『春興帖』(逸題)は、年記なく、巻頭句、

此春の東雲、関西に風友を訪らはん事を思ひて、

立出ん我が恵方は芳野やま

雲石舎露慶

の前書きにより、『もとの道』の翌年、文化三年(一八〇六)のものと推定される。やはり北毛の作者が多く見え、

世の中やきのふは過て今朝の春

ト々庵其雲

など其雲も3句入集する。巻末は白眼台改風松台・乙二・白兔・以足・金令・露慶で終わっている。

こうした露慶・以足と北毛俳壇の濃密な関係は、遡って『野梅集』<sup>⑨</sup>(寛政十一年・一七九六)にも見られる。露慶が俳諧の因みの深い、迦葉山麓<sup>はつち</sup>発知に住む蛙水の七回忌に編んだ追善集で、雲石舎

露慶の自序と牛文庵以足の序、白眼台風松の跋を具える。巻頭の歌仙は、

此あたり白雲もなし野路の梅 古／東向舎蛙水

の遺吟による脇起こしで、脇以下は露慶・書郊ほか沼田連中による一巡で、挙句前の花を牛文庵（以足）が詠んでいる。東都や武蔵・信州・下総ほかの作者も若干見えるが、やはり地元発知が最も多く、23名を数える。

なお、露慶は『諸国俳士録』（写本、綿屋文庫蔵）によると、

住所は江戸浅草聖天横丁藤四郎店で、俗名は榮三郎。春興帖には、巻頭の自句について、「釈」と肩書きする下牧眠子・ゆはら可来・後閑五調・沼田昇之・糸井清風・発知雪嘗・白岩布什と7名を並べ、『もとの道』でも巻頭近くに「釈」と肩書きするゆはら可来・下牧眠子・沼田昇之・糸井春峨・後閑月小川五調・平出一止・ゆはら正之の7名を並べており、迦葉山龍華院（曹洞宗）に関係する人物と思われるが、確証はない。

『沼田市史 通史編2 近世』六六六ページによれば、「迦葉山の龍華院は幕府の祈願寺として、上発知の内に寺領一〇〇石を給与され」、「下発知村の豪農で名主だった松井氏は、寛政八年（一七六六）本堂の建築費と開山三百遠忌の費用を寄付した」という。また同書六六〇ページによれば、上発知・中発知には各2寺、下発知には1寺の末寺があるというから、そうした末寺の関係者が発知連中として露慶の選集に加わり、連中の指導者蛙水も松井家当主とか、末寺の住職といった、地域の中心的な立場の人物だったのであろう。

沼田は3名と意外に少なく、沼田藩士は松桂庵書郊のみ。奈良

は、はるひの2句と左部家の、

礼言て出れば又降しぐれかな

片岡や霜に身を啼月の鹿

鶯に伊勢の髪長恥る哉

、（上毛）奈良如舟  
、（上毛）奈良左南  
其雲（ほか2句）

の計4名。ほかに上毛では上川場・生品・岡谷各7名、上牧5名、藤原・谷地・白岩・硯田各4名、平出・屋形原各3名、下古語父・八幡・秋塚2名などとなっていて、巻末には名古屋の士朗、浪花の大江丸・一炊庵、京の丈左・李流、三州吉田の木朵といった諸国名家、東都のみち彦ら、白兔園の四世から改号、分派した夢和と国圃、白兔園の五世宗瑞ら詞宗12名、葛飾派野逸らの詞宗4名、白兔園支流白眼台とその門人10名で、巻軸が牛文庵となっている。

本書は本多夏彦著『上毛俳書解題（第一輯）』（上毛文化会、昭和十五年）に取り上げられ、その概要を解説した後、「沼田城下があれだけ松露庵俳諧の金城湯池なりし時代に於て、全く別な系統の俳人が、かくも無数に存在したかと思ふと、沼田谷の抱容力の大きさに驚かざるを得ない。其地方の俳人を研究する上には、既掲の『花野塚』や『春の遊』と同様、貴重なる資料といへる」と評している。

ところで、かつて『諸国翁墳記』（三十二ノ裏）に、

『薫風塚』上州利根郡白岩村観音堂建 二世雪才

松杉を嘗てや風のかほる音

とあるのを目にし、なぜ松露庵勢力下の沼田の白岩に、白兔園系の雪才が翁塚を建てているのか、不思議に思ったのだが、風度編『をさなぐさ』（文化十一年・二四）によって疑問が氷解した。

編者は雪才門の高足で——『もとの道』に付載する句録部分で

は、風渡の号でトップに収められる——、その中に次のような記載があったのである。

牛文庵病中、半切紙へした、め置れし筆の跡、其俣彫刻す。

石文建し国所

上州利根郡沼田白岩観音堂境内

松杉を誉てや風の薫る音

すゞしさや秋は魚啼此あたり

白眼台雪才建る

同国高崎館村朱福寺境内

這出よかひやが下の蟾しんの声

日の箔の砂にこぼれて暑哉

白眼台雪才

常州鹿島御手洗

すゞしさや神代の俣の水の色

白眼台雪才

江戸眼白台蓮花寺境内

いざ、らは雪見にころぶ所迄

出て見れば瓦濡れけり春の雨

右、白眼台雪才の句也

二本ならびて牛文庵以足建ル

房州小湊誕生寺

日の影や花に寄波かへる波

白旗明神前 相州藤沢宿 右、同断

東路や花にくるまる鈴の音

遠州見付宿天神宮

しら梅や境に向ふ朝心

上州迦葉山寺内

峰の花仏法僧の啼雲歟

(下略、京都・和歌浦・伊勢・よしの・橋立・

巖島・松島・小野の滝・寢覚の里の各一句)

『広茗荷集』(野桂稿本、文政九年・一八二六)によると、「江戸眼

白台蓮花寺境内」に建てた碑の裏には、「寛政五癸丑年十月十二日／現住白眼台雪才建之」とあった由で、同寺(日蓮宗)は明治期に野方に移転して句碑は行方不明だが、雪才の素姓が判明する。

ところで、白岩観音堂境内に建てた翁塚は、本多夏彦著『上毛

芭蕉塚』(みやま文庫30、昭和四十三年)では、「沼田谷に全盛を極めた江戸松露庵系の俳人として、兄貴株の沼田市白岩中島氏松茂庵布仕が、寛政九年、江戸の宗匠白眼台雪才の後見で自家の墓地にあった観音堂(いまはない)境内に建てたもの。当時記念句集も出ている。云々」と記される。記念句集は筆者未見。地方作者の常として、布仕は松露庵にのみ所属していたのではなく、露慶―以足のラインで白兔園系とも交流をもち、前掲の俳書三点にも、

捨て後生いさて走りぬ夏の虫 上毛青蔵坊布仕(『もとの道』)

世を通れたる松下に春をむかへて、

うつ伏ふせし白のおかしや梅の花 布仕―ほか2句―

武蔵野にこゝろ留るすみれかな  
(露慶編『春興帖』)

、(上毛) 白岩松亭布什―ほか2句―  
(『梅野集』)

と入集し、その息素牛の句も見える。

布什の略伝は、樗村霞道著『上毛古俳家全集』に以下のようにある。

其先藤原將監光辰七世の孫である。蓮根村大字白岩に生れた人、通称を庄助といった、僧となり俳諧を好み、又書をよくした。門弟三十七人を訓育し、号を青歳坊又は松茂庵といった。俳名四隣に響き渡つたのである。文化十一年七月十日、享年六十三歳をもつて歿した。同村自性寺の住職であつた。

法位「権大僧都大阿(闍)脱」梨法印乘尊大和尚、その墓は自性寺にあり、碑は白岩観音堂墓地にある。

白萩や浮世を通る道細し(辞世)―

因みに初世の雪才には『流れ井』(寛政三年・一七九二)の編者があり、所収の文章によれば、師二世宗瑞が目白台に転居し、別称を白眼台に改めた時、前号蘭桂を雪才に改めている。寛政七年(一七九五)七月九日、享年62で亡くなり、二世白眼台雪才が追善集を刊行、中村俊定文庫(早稲田大学図書館)のペン写本によれば原題簽は辞世吟「秋たつや夕部の蜚けさの露」に因んで『蜚露集』とあつたらしい。二世雪才は、寛政十二年(一八〇〇)の徳布編『庚申元除春遊』に「雪才改以足」とあることや、可都里の『諸家文通発句集』<sup>(10)</sup>に寛政十一年五月二十八日出、六月六日着の雪才文音7句が書き留められ、伊勢・和歌浦・京都での近詠句を含んでいて、所書きが「江戸牛込」とあること、前出『諸国俳士録』

に「雪才 江戸牛込御細工丁 清水(以下空白)」とあることからすると、十一年春、伊勢から京都方面へ行脚に出、江戸に戻つてから牛込の「牛文庵」に入つて間もなく以足と号を改め、別号白眼台を風松に譲つたことが判明する。

## ②『花野塚』と沼田俳壇

沼田近郊の村方について、沼田城下、町方の俳壇状況を『花野塚』(文化二年・一八〇五)により一瞥して置こう。同書の原題簽は「<sup>諸</sup>花野塚 花仙居士追善集 全」、序はその頃沼田に遊歴、俳匠として足跡をのこした無耳庵南鱸子蓮阿が寄せている。口絵には野辺に立つ「翁蒼花仙居士」の墓碑が法橋永春(印「義信」)の筆により薄墨摺りで描かれる。余白には「享和三癸亥年九月十二日/行年八十四歳」と没享年が記され、花仙は享保五年(一七三〇)生まれと判明する。墓碑の上に「辞世/行先のすゑ広ぐ」とはな野かな」を配し、挿絵の左端末尾に絵師の落款、その下に「上毛利根郡沼田/家嗣/矢嶋桃蔵建之」とある。

花仙の俗名等は、前橋の素輪による『俳人名録』(『関東俳諧叢書』第三十二巻所収)の記載、

### 上野国

居楽 吾妻原町

花仙 原町 矢島新六 伊兵衛ト公儀名

あるいは本庄時代(寛政後半)の長翠による俳人名録『諸郡銘録』(『本庄市史 資料編』昭和五十一年、所収)の記載、

上毛沼田

花仙 八鳥屋伊兵衛

倍我 藤蔵

を手掛かりに『沼田市史 資料編2 近世』を検索すると、「(寛文五年—天和元年) 真田伊賀守家中附」に、

買物衆式人

一金五両二式人扶持 矢島 伊兵衛

一同 田村 八左衛門

との記載に逢着、花仙の先々代(?) と思しき人物の存在が確認できた。

『沼田市史 通史編2 近世』一六〇—一四〇ページによると、

延宝八年(一六八〇) 閏八月の大雨で江戸の両国橋が大破し、藩主真田信利は藩財政建て直しのため、架け直しの用材を請負う。しかし、打ち続く異常気象による大水や飢饉に見舞われ、用材を期限までに間に合わせる事が出来ず、天和元年(一六八〇) 末、信利は用材請負の不首尾と藩政の越度を理由に改易され、翌二年正月には沼田城も破却されるに至った。家臣は離散し、主君らの配所に供として従う者、沼田で後始末に従事する者以外はほとんどが浪人、多くが江戸などの他郷に去った。浪人した者が領内に居残るには、『天和元年／沼田城破却記』(左部家旧蔵写本、『沼田市史 資料編2 近世』所収の三〇) によると、「在々二住度と申族ハ、穿鑿之上心次第可差置」(一一九ページ)、あるいは「家中浪人沼田領二住居望之族ハ、其品々帳面二相記、御目付衆江差出之、竹村宗左衛門殿、熊沢武兵衛殿方江手形差上住居也」(一二三ページ) という条件さえ充たせば可能だったようなので、花仙の父祖はそれに従い、役職の縁から領内に残って商家となったのではあるまいか。

本文の最初に、

遺吟

はつ梅や蝶も夢にもしらぬころ

花仙居士

以下八章、編者らの「追悼之辞」と手向吟、

秋雨や弥陀のとほしの身に入る

家嗣倍我

と、さまやあのをいはひがぢうさま歎 倍我長男五歳邦松

おさな子のかくすさみ給ふもなみだのたねとて、

着せ申す力さへなき袴衣哉

邦松乳母しな

続いて花仙居士の「病中の吟」による脇起こし歌仙を収め、脇が倍我、第三が書郊、以下は身内や沼田連中の一巡で、蓮阿が挙句前、倍我が挙句を詠んでいる。

次も花仙居士の句による我妻連の脇起こしで、一峨らの六吟半

歌仙が収められる。『沼田市史 通史編2 近世』九八〇—九九ページによると、真田家の知行高は九一四八石余、その内訳は利根郡

が一八二七石、吾妻郡が七三二一石余で、吾妻郡が八〇パーセントを占める。同書一三八ページに、改易時の真田家家臣中の吾妻

衆として鎌原縫殿ら6名を挙げるが、一峨らは彼らの子孫か関係

者であろう。花仙の居住地は挿絵の住所記載や、

やすらひや小石まばらにかゝつぶり

上毛沼田花仙

(白雄編『春秋稿』四編、天明四年・一七六四)

の入集句などにより沼田と思い込んでいたのだが、素輪社中の春

興帖『みどりの友』(明和九年・一七七二)に、吾妻の3名、高井の

燕飛に並んで、

梅さくや雪は桜のやまへよる

うぐひすや耳塚も日にあた、まり

原町 花仙

全 来義

の2句が見え、先に引いた素輪の『俳人名録』もその頃書き足した部分なので、50歳頃の一時期、真田時代の沼田藩領、吾妻郡原町に居していたことになる——次男を分家、支店を出すに当たり、軌道に乗るまで花仙が支店の切り盛りをしたのではあるまいか。

吾妻連の後、沼田藩中の4名、東都藩中の烏声、浪花藩中の素十、沼田町の大樗ら38名の発句を収め、その内の、

月花に名を残しけり翁岬

其水

と詠んでいる其水は、『上毛古俳家全集』に「通称を清兵衛といひ、其先は江戸にあつた。沼田城主真田公に仕へて此処に來たり。其歿落と共に土着して商人となつたのである。其風は初山家三代目の人で、百貨店を営むのかたはら俳諧の道に親しみ一扇居または千秋庵と号し、好んで諸国を遊歴し、あらゆる名俳と交はり、其名を知られた。云々」と記されていて、やはり花仙の矢鳥家と同じ命運を辿つた家の子孫のようである。前出「真田伊賀守家中附」によれば、初山姓は御鍵奉行、貳百五拾石の初山内藏之助と、同奉行、貳百七拾石の初山要八郎の2人を挙げる事が出来る。

沼田近郊の村方では、

あ、仮よ月見る事も是からは

ナラ其雲

けふ菊に名のみ翁風の露

シライハ布什

ほかの8ヶ村、我妻の原町・伊勢町・青山・山田（半歌仙の6名と重なる）、隣国越後の関・小千谷、信陽の飯山・伊那・水内、遊俳の最後に著名な榛名の如鶴、前橋の素輪、高崎の女一紅を据えている。さらに「亡父花仙知己古人吟」として沼田町の如布・麦泉・太朗・烏孝・春湖・梅志ら7名と我妻連の来儀ら5名を収

める。

因みに、故人では素輪の『俳人名録』に、

夜松窓梅志 沼田材木町 木内閑助

麦泉 下ノ町 原沢十兵衛

如布 沼田中ノ町 林 忠右衛門

の3名が見え、長翠の『諸郡銘録』の「上毛沼田」の部には、

大樗 磯田屋専左衛門

太朗 木村 綿屋儀兵衛

大布 清野 河野屋半兵衛

の3名の俗名が記され、現存者も『諸郡銘録』の「上毛沼田」の部に、

豊志 高野 十二や源兵衛

巖々 青木 吾妻や文七

我認 清野 十二や和七

東葵 熊野や 宇高善兵衛

左来 清水屋 関 仙助

布什 白岩 中島庄助

の6名、「上高平」の部に、

是牛 小野嘉平次

龜島 同 茂兵衛

の2名が書き留められている。

宗匠では、存命中として小菰庵長翠・松露庵坐来・平花庵雨什・行脚来蘇・無耳庵蓮阿の5名、故人として、活々坊旧室・松露庵鳥醉・同 烏明・春秋庵白雄の4名の句がそれぞれ太字により記されている。これらによっても、花仙ら沼田連中がどのような俳匠



に指導されて来たかが端的に窺えよう。

締めとして花仙居士の遺章による偈我ら四吟半歌仙と追加の発句五章、「大尾」として偈我の跋と句、「悼邦松辞」と偈我ら親族と僧侶による追悼の表八章、そして松桂庵書郊が跋と追善句を寄せている。

書郊の跋によると、花仙は四十年來の俳友で、明和三年（一七六六）、烏明と昨烏（白雄）が沼田に來遊したのを機に入門したのであらう。しかし、諸俳書を調べても、前掲『みどりの友』のほかには天明二年（一七六三）七月の松露庵月次の高点書き抜き句、

行水の流にそだつへちま哉 上州沼田 花仙（『松露庵隨筆』）

天明四年（一七六八）、白雄の誘いに応じて『春秋稿』四編に寄せた句（前引）を見出す程度で、交友範囲の広い割には積極的に投句したり、俳書を出版したりするタイプではなく、書郊が跋に記すごとく、「常に濃酒を好み、ある時は三弦にたわれ、古風の唄など諷ひ、こゝろを慰め」る風流人だったのである。偈我の「大尾」によると、本書の上梓予定の三回忌に鍛冶町の正覚寺で雅筵を催したようである。

本多夏彦著『上毛俳書解題第一輯』では、概要を述べた後、「追加の殿りとして洛の一無庵丈左の一句（引用省略）の詞書に、『花仙老人の伏戸を叩きけるにはや身まかりけると聞へて』とあるに依て、丈左來遊の一資料たり得ること」を珍重しているけれども、篠木弘明著『上毛俳諧史 二編』（俳山亭、平成十一年）三一二～五ページによれば、丈左は文化三年夏、白河に下った折、松平定信公に召されて三日間登城し、その帰途、八月下旬に上毛新田郡八木沼村の一魚亭に滞留しているから、沼田に立ち寄ったのは

その後のことであろう。したがって、「文化二稔乙丑長月中旬彫工／東都中出斗園門人／山尾堂斗南」との奥付があるけれども、実際の刊行は一年ほど後のこととなる。

### ③久呂保山人甫天喜

化政期の北毛俳壇が生んだ異色の俳人に甫天喜がいる。甫天喜については本多夏彦著『上毛芭蕉塚』六九ページに、「旅人とわが名よばれん初時雨」の芭蕉塚を解説した中で、建碑者として「久呂保山人」の名を挙げ、篠木弘明著『俳山亭文庫書目解説』が「久呂保甫天喜」の項で、「利根郡久呂保村森下の俳人、伝歴未詳」とし、「はつしぐれ』『絵空言』の二書を取り上げて解説しているぐらいだが、中村厚子氏提供の複写によると、『村誌久呂保』（昭和三十六年）四四七ページの「句碑」欄には、「保摘【表】開眼覚翁大徳 【側】辞世 居所のきまりもなしに夕涼甫天喜 【側】文政六癸未年五月十九日 橡久保北／金井定吉氏墓地（石塔に辞世あり）」の記事と墓石写真が見え、後身の利根郡昭和村の「広報しようわ」（ホームページ）では、平成二十四年六月の9ページに掲載される「昭和村歴史年表」の「文化・文政年間（一八〇〇～一八五〇）」の項に、「橡久保出身の行脚俳人、金井甫天喜（久呂保山人）、文化十一年（一八二四）全国行脚中の俳諧句集『はつしぐれ』、文政元年（一八二〇）俳画集『絵空言』2冊の句集を発刊する。晩年、江戸玉川に住す云々」と記されている。橡久保は昭和村の森下の北隣りで、利根川の支流である片品川を挟んで沼田市の南部、沼須町に隣接する。

『はつしぐれ』の柳隣国甫の序によると、編者は不惑の年に発

起してはるばる東武の国甫を訪ねて入門、甫天喜の号を与えられて二年余ほど俳諧修行、その後発起し、遠く陸奥の松島から不知火の筑紫湯まで遊歴、一旦帰郷して文化九年（一六三）十二月、森下天満宮境内に「旅人と我名呼れんはつしぐれ 翁」の「時雨墳」を造立する。そして、遊歴中に諸国俳家と卷いた連句や書き留めた諸家の吟詠をそのまま朽ちさせるのを惜しみ、句碑を口絵に、静斎と国甫（文化十一年仲冬）の序、久呂保山人の自跋を付して刊行したのである——久呂保は赤城山の別称。詳しくは後述——。

因みに、甫天喜が師事した国甫は、『諸国俳士録』によると、江戸護持院前通り東青柳町の住で、俗名は吉田弥十郎。前出の『梅野集』やこの頃の白兔園系『旦暮帖』に三世夢和連の詞宗として入集、夢和三回忌の『復古集』（文化二年・一八〇五）には海鶴斎国甫として序を寄せている。夢和はもと四世宗瑞なので、白兔園系支流の俳家ということになる。

家藏本は、川場村萩室の玉声旧藏本だけれども、「上毛沼田連」は、

啼水鶏竹を放れて軒の月

其雲

長き日やうづめ課せて炭団の火

乙人

冬の月もの影もなき山の野に

古人如舟

行雲の何やらこぼす小春かな

露彦

ほか90名の発句が入集する。連句は、尾張の士朗や江戸の成美、松山の樗堂ら名家と唱和したほかに、故翠ら6名の月夜野連との半歌仙、沼田で唱和した山和・和翠との半歌仙、同城下で卷いた文鳥・白石との半歌仙、同じく榎亭で卷いた巖々との27句、上牧

で兎笑と唱和した半歌仙などを収めるなど、北毛俳壇史を説くには逸することの出来ない書目となっている。因みに、旧藏資料中には、『はつしぐれ』に収められていないけれども、乙人と両吟した歌仙一卷、

### 俳諧連歌

初秋や何処を目当の山鳥

甫滴

以下の歌仙句稿一枚があり、奥付は「右、文化九年／八月朔日興行」。

『絵空言』は大本の絵俳書で、単郭各半丁の上 $\frac{1}{2}$ に俳論や連句、関東などの各地俳家による自筆発句、自画賛句、下 $\frac{1}{2}$ に自筆画賛句の模刻を収める。白兔園系と親交のある雪門の古老、夢松が序を寄せている。本文の巻頭に、

飛ちがひ三物

長崎の歳旦囉ふ歳暮哉

此句儲けし比はさみだれ

さみだれて馬の尾乱五月雨で

北枝へ送る はせを翁

と芭蕉の三つ物を掲げるが、もちろん偽作で、ほかに所伝がない。以下には、甫天喜の地元北毛ももちろん多く、左部家の関係では、

世の中を観じて、

こゝろなき水陽炎の中を行

上毛奈良其雲

ひぐらしや翌日はあしたの神次第

上毛久呂保之麓乙人

の自画賛が収録されていて貴重。そのほかでは沼田の巖々ら7名、月夜野の志調・左山、上牧の清月舎兎笑などとなっている。



その他の顔触れでは、『はつしぐれ』に引き続き武州玉川の5名が目立っている。

玉川(多摩川)は本来、川の名で、具体的にどこを指すか判然としないけれども、文化二年(一八五五)、多摩郡猪方村(現、狛江市)の名主宅に寄寓中の浪人(元土浦藩士)が発案、面識のある松平楽翁(定信)に、有名な

多摩河泊爾 左良須弓豆久利 佐良佐良爾 奈仁曾許能児能  
巨許太可奈之伎(『万葉集』巻十四、東歌)

の歌を揮毫して貰い、歌碑「玉川碑」を建てており、その余波と思われる——『江戸名所花暦』(文政十年・一八二七)巻三「玉川」の条に建碑への言及がある。原碑は、文政十二年の洪水により流失、大正十一年(一九二二)に拓本により狛江市中和泉に再建——。

甫天喜の師国甫と同門の文尺斎花城は、既述のごとく師の三回忌集『復古集』を刊行している。桑門明円七十六翁白其・海鶴斎国甫序、編者文尺斎花城自跋。序・跋ともに時あたかも「玉川碑」が建った文化二年冬十月の日付けである。寥和が調布に訪れ、門人らと舟遊びをした折の、

水は行人は止る命かな

寥和

を立句とする国甫・花城らの一巡歌仙と、舟を下りてから玉川に題して競詠した四季吟を類題別に収めた、玉川連中を中心とする選集となっている。以後、「玉川」の地名は同派の表象として特別な響きをもつようになり、同様のことは北毛の甫天喜らにとつての「久呂保」についてもいえるだろう。

試みに『はつしぐれ』に見える玉川連中を調査してみると、

武玉川麗山亭にて

露に寝てつゆともならぬ命哉

甫天喜

以下の半歌仙を両吟し、『復古集』にも載る宝水は、『諸国俳士録』に「稲毛二子ノ向溝ノ口 灰吹屋仁兵衛」、卓池書留めの「諸国人名録(B本)」「大磯義雄著『青々卓池と三河俳壇』名著出版、平成元年、所収)には「玉川溝ノ口葉店 灰吹や定八」と記されていて、住所は狛江よりやや下流の対岸溝ノ口と知れる。同じく雨籟は、『神奈川県史 各論編3 文化』二六六ページに「田村雨籟は滴堂といい、昌甫と称し、別に松閑堂とも号し」たと記され、『諸国俳士録』にも「稲毛街道二子渡手前ノ用賀村 田村昌達(甫と訂正)」とあって、溝ノ口の対岸、現、世田谷区用賀の住と判明する。

花城は晩年自選の発句集を刊行、やはり万葉歌を意識して『調布の真砂』と命名している。その翻刻が石井光太郎編『神奈川県郷土資料集成 第三輯 俳諧篇』(神奈川県図書館協会、昭和三十四年)に収められる。解題によれば、花城は溝ノ口よりやや下流、橋樹郡南加瀬(現、川崎市幸区)の人で、晩年には寥和を襲名、天保二年(一八三三)十一月十三日、83歳で亡くなっている。

晩年の甫天喜は、たとえば文政四年(一八三三)の白兔園竹道編『旦暮帖』を閲すると、巻軸の寥和(四世)・国甫・文尺ら一列の9番目に、

若草や空の澄なる豆腐船

甫天喜

の句が収められている。従って寥和門の詞宗に互して活動をつづけ、二年後、同派の地盤である玉川流域のどこかで没したことになるが、具体的には判らない。後考を期したい。

## 七 松永乙人と天保期の北毛俳壇

### ①露彦と古学・画技

ここで『俳花野集』(前出)に序を寄せた蓮阿について若干補足をすると、蓮阿は従来ほとんど知られることのない存在である。ただ、『上毛古俳家全集』五〇ページによると、勢多郡南橋村下小出の俳家、藍沢無満14の師と伝えられ、上毛に遊歴、少なからぬ痕跡を残した。住所・出身・年齢・俳系などは一切不明で、管見では由和編『秋のはころび』(明和五年・一七六六)に江戸の所書きで五色墨系柳居門の門瑟・米珠と並んで入集することに気付いたぐらいで、同じ五色墨系の蓮之、後の珪琳の門人でもあろうか。沼田には文化初年に流寓、地元の書郊と並ぶ俳匠として受け入れられた。旧蔵資料の中にも、無耳庵の名が出て来る書簡2通が含まれる。

(宛名表書き) 南斎先生キ下

万葉返事

久々不貴意候得共、弥御清榮之よし、奉珍賀候。しかれば、此程沼田町、我穂子与両吟はじメノ員、御目ニかけ度、差遣し申上候。御一笑可被下候。且又貴公様御風雅、いかゞ。めづらし。余り打絶ゑ申候。何卒玉声承度奉存候。またく来月初四日、無耳庵ニおゐて一席可仕よふ、黄麟、先に御漸有之候間、何卒御見合被遊候て、御光席奉待人候。秋塚完明子方へ無耳叟より之伝声、私承置候間、完明子事ハ、是非く四日ニは沼田町へ御出のほど、貴公様、よろしく申上聞可被下候。貴丈先生ニも、

我穂より之つたへ、私儀も御漸御座候間、四日ニは間違なく御出奉待人候。何事も急便故、余者貴顔の節、可申述候。以上。

正月廿四日

糸遊あるきや歩行あるきながらも眠る、(ほか11句)

急便故、余略

宛名の南斎は、其雲のことであろう。差出人の万葉は、同筆の南斎先師宛書簡には左子南とある。文化九年七月三日、万葉軒開巻の句合(書郊評)がある。左南の別号であろう。はじめ奈良、のち上久屋の住。「我穂」は「我穂」とも書き、「清野氏、十二や和七」(『諸郡銘録』)。

今一通は秋塚村の宮田完明が、露彦に宛て、「生品後席歌仙」の評点の成績結果を、「無耳宗匠方ハ私勝ニ御座候」云々と報じた、五月十六日付けの書簡である。丁度その頃、文化四年四月十五日奥の蓮阿加判の「梅の香」脇起こし半歌仙合(於五朗亭開巻、天ニ蓼化、地ニ完明、人ニ左南/柏子)も伝わり(浜名敏白氏蔵)、その袋には集者が生品の蘇交・柏子と記されている。

蓮阿が何時まで沼田に寓居したか不明だが、後には上方に漂泊したらしく、丈左が佐波郡采女村木島(現、境町木島)の門人大谷紫陌に宛てた年次未詳、九月十八日付け書簡の中で、「一、蓮阿坊、長翠也と名乗、かミ方へ出かけ候所、何とやら評よからずと尾州より申来候。おそろしきやつにて御ざ候」と風評を伝えている(『伊勢崎市史 資料編3 近世Ⅲ(文芸) / 付録 近世文人書状』昭和六十一年、二〇二ページ)。

蓮阿評歌仙合で天となった蓼化、のち露彦は、略系譜に記されるごとく、文化十一年(一八四四)六月十日、27歳の若さで亡くなっ

ている。文才に優れ、俳諧のほかに古学（国学）にも志し、画も学んでいた。その方面の書簡が旧蔵資料中に含まれていて、沼田の当時の文化状況を示唆する貴重な資料なので、参考として宛名別に各一通を掲げる。

（封表書き）奈良邨尔而／佐部斧二郎様 高橋与一郎

平安状

（封裏書き）未五月二日認出 自滑田本陌

左 伯基足下 五岳

尔後ハ久闊之處、時下達句鬱々然、彼莊周寓言之事、念出候節、為御安否問尺書如許。愈御万福候哉否、僕亡恙、御邪念被下間布候。陳バ春中差置申候助字釈通、僕、此節入庸出来申候故、来七日之内迄ニ何卒御寛壁可被下候。右、申述度、勿々頓首。

端午前四日認

（別紙一）其二申入候。神代書并四十七言之書、御返済可被下候。又々御用も候ハ、差上可申候。勿々頓首。

（別紙二）其三に申入候。日増暑氣強時節御坐候時候、御自愛之段、御家中皆々様江宜御伝語被遊可被下候。此段奉懇上候。

并御隣なり子介君へも右同断之義、御寄声之程奉懇上候。頓首。

時五月二日 五岳陳人 高 謙齋 白

左 伯基足下

\*沼田本町のことであろう。 \*庶子のこと。

差出人の高橋謙齋、与一郎、号五岳陳人については、『沼田市史 通史編2 近世』を参照したけれども、該当するような人物の記事は見当たらない。今一通の五岳陳人の書簡は「文化五年星次

戊辰夏五月八日」の日付けで、常陸国図の返却受取状。

（宛名表書き）奈良村ニテ玉璘雅丈貴下 沼田上ノ町／漆 玉湖\*

托行李、呈啓仕候。追日而時分柄御取込、殊ニ別而寒氣嚴敷御坐候所、御家内無御障、御壮健ニ被成御坐奉珍喜候。随而野子も此間、一兩日中、少々風者氣身ニテ罷在候。是与申茂、老足事与奉存候。余リ此程打絶御遠々敷、御持病之様子罷申越、未本快ニ無御坐候哉、承度奉存候。先日詔之画、何分御世話被下度、偏奉頼上候。悴民之助十日後、政七殿帰之由、一流ニ遣申度ニ付、金子入用到来仕候故、御世話御無心申上候。何卒御取被下候而、御遣被下度、偏奉存上候。絹地之分、画料御心遣ニハ不及候。若馳家ニ候ハ、与申事ニ御坐候間、左様思召被成下度候。余ハ貴顔上可申上候。以上。

法橋玉湖

極月六日

玉璘雅丈

追啓申上候。若又先への約速等ニテ、画料之間違等之義有之候ハ、百文式杯ハ何分ニも貴公様思召次第ニ奉頼上候。不備。

\*漆原の一字名で、別姓か。 \*富家。

玉湖の書簡も今一通あり、それには差出人が「大塚玉湖」と記され、日付は「十四日」とのみ。臼井法印が入門したいということとで来訪、そのため今日の約束は急遽取り消し、一兩日中にこちらから訪問する、との文面。略系譜に「画学は越の人玉湖を師とす」とあるように、魚沼郡小千谷の大塚玉湖からの書簡で、文化五年（一八〇〇）頃には沼田に仮寓（？）していたようである。

玉湖は、『北越雪譜』の著者、塩沢の鈴木牧之が玉湖描くところの雷獸図を送り、それを馬琴が自著『玄同放言』（文政元年・一八二〇）に載せたことで知られる程度で、今日では殆ど無名の絵師といつてよい。『玄同放言』によると、玉湖は小千谷袖の沢に住んだ豊与の孫といふ。<sup>15</sup>『鈴木牧之資料集』（鈴木牧之顕彰会、昭和三十六年）二四ページの記事、「天明三庚卯年十四才の時、十一月中、六日町遠藤伝左衛門殿方へ、法橋玉元、後東都へ出、狩野梅笑と云画人、三十日計りも逗留之節、彼之地今成家ハ、義三治（牧之）姉嫁故、罷越シ入門仕、弟子入門之巻軸二血判致シ候」によると、牧之は少年の時、画を依頼されて一時帰郷した狩野梅笑こと玉元入門、恐らくその関係で玉湖とも親しくなったのであろう、享和元年（一八〇一）八月、掛物数幅を仕立てるのに経師屋、「小千谷玉湖悻大塚栄蔵」に頼み、翌年五月から六月にかけても手鑑の細工を栄蔵に頼んでいる（牧之著『永世記録集』、『鈴木牧之資料集』一九〜二〇ページ）。

露彦も牧之と同様に、画業で沼田に長期滞留していた玉湖に入門したのであろう。しかし、残念なことに、露彦の絵画作品は伝わらず、その技量のほどを確かめることは出来ない。

## ②乙人の立机と『葛芽』『つきなみ集』

以上のように如舟・其雲の二世代はともに遊俳ながら句作に励み、地元でも尊重され、其雲の晩年にはその指導を願ひ出る近在の初心者たちもいた。

（宛名表書き）上なら村／佐部斧三郎様／御尊下

自門前 桑原林左衛門

―猶々書き、省略―

強暑之砌、其御地御家内様被成御揃、愈御莊栄之由、奉寿候。次而拙家事無異候間、是亦御休意可被下候。且又、先日ハ御立寄被下候ところ、何之風情もなく、残念不少奉存候。然ば、其節猥二入貴覽二候一件之品、谷地組小野吉兵衛方より貴公様御尊父様御願申、御引墨被下候様与思召候之事二候。依て御目懸ケ申様なる事二ハ無之御座候へども、貴覧入候間、宜敷御取成被下、御引墨之段奉願上候。随分稽古御座候間、無御遠慮様被御仰聞可被下候。折節取込、早々乱筆御用捨可被下候。謹言。

水無月廿一日

\* 門前・谷地はともに川場村の内、奈良の近村。

斧次郎＝露彦は文化十一年（一八四〇）の没なので、その二、三年前のものであろう。

蓮阿が沼田を去り、書郊が文化十二年（一八五五）に73歳で亡くなると、北毛俳壇は彼らにかわる指導者を必要とした。奈良村の其雲（文政十二年・一八三〇没）や秋塚村の完明（天保九年・一八三九没）といった古老が繋ぎとしてその役割を果たしたが、やがて在村宗匠として立机し、判者となったのが上久屋村の松永乙人である。

乙人は略系譜に示したごとく、如舟の3女と鯉養子の間に生まれた3男の要之助で、天明四年（一七八四）生まれだから、露彦の四歳年上となる。上久屋村の松永家に養子、管見では文化八年（一八二二）から其雲・露彦らと書郊評や松原庵兀雨評の月次句合に参加するようになる。翌九年七月三日開巻の書郊評月次句合では、露彦とともに参加、村内の万葉軒における開巻では立会（3名）

を勤めている。因みにその結果は、天が露彦で20点、地が素竜・乙人・素喝の3名で13点であった。その翌月朔日には、既述したごとく、甫天喜と歌仙を両吟し、甫天喜編『はつしぐれ』（文化十一年・二四）には古人如舟・其雲・露彦とともに入集し、同編『画空言』（文政元年・二六）には其雲ともども自画賛の模刻一点が入集し、その画技を窺う貴重な資料となっている。

以降、所見の範囲では、文政七年（二八四）、41歳のとき、夜々を雨にさはがす火桶かな

上州乙人（蕪街編『しきまつ葉』）

麦かれる日和の中や桐生市 上毛乙人（太笥編『寂砂子』）

夢に来てしぐれのさわぐこたつ哉 上野乙人

（井眉庵編『華鳥文庫』）

と句を載せていて、諸国の俳家と広く交流、次第に北毛を代表する存在と目されるようになる。その契機となったのが、処女選集『葛芽（くずのめ）』（半紙本2冊）であった。

『葛芽』には鶯笠（後の鳳朗）の序、八巢蕉雨の跋が具わるけれども年記なく、刊年不明。上巻には、巻頭の「いさ、かな花にも見ゆれ奥と口 鶯笠」以下の乙人との両吟、「日に向て蚕も起ぬほと、ぎす 護物」以下の乙人・碓嶺との三吟、「なすことの減るにつけても秋の月 太笥」以下の乙人との両吟、以上歌仙3巻を収め、発句は実父の句、

歳の夜の空からも来る御慶かな 西郊

をはじめ、上毛ほかの諸国名家吟を収める（「うぐひすやよくあきらめた籠の声 一茶」を含む）。下巻は、巻頭の「雪になる空や鵬の十五日 蕉雨」以下の乙人との両吟、「夕くれやなんにも

なくて不二のやま 寥松」以下の乙人との両吟、最後に、

―前書き省略―

いざけふも旅の身にせむはつしぐれ 乙人 \*左脇に「を」と訂正。

以下、其雲・完明らの一巡。以上歌仙3巻と、洛陽・武蔵・江戸ほかの作者の発句、巻軸に蕪村・鳥酔・暁台・蓼太・几董・白雄・成美ら物故名家の句を収める。それら物故者の内、虎杖は文政六年（二八三）八月の没、存命中の父親西郊は文政十二年二月没なので、その間の成立であろう。

上毛の部は過半が北毛の作者たちで、左部家の三代の作も、

冬の月もの影もなき山の野に 如舟

昼中のくひな寝て居るはやし哉 其雲

今朝のつゆ狼らしき犬にあふ 亡人露彦

と収められている。

『上毛古俳家全集』以来、乙人の師とされる無滴の句も乙磨の初号で収録されるが、蓮阿の指導を受けたという共通項はあっても、師弟関係を裏付ける資料は見当たらず、選集刊行も乙人の方が早いので、無滴を乙人の師とするのは誤伝と思われる。

家蔵本には、別掲のように摺った小紙片が挟み込まれていて、当時、江戸でもっとも声名の高い5大家を窓口に、諸俳家にひろく文音をもとめていて、乙人の俳壇に対する意欲を窺うことが出来る。

沼田市教育委員会が蒐集した複写のなかに松永郁夫家の乙人資料があり、その中に、

文政丙戌歳（九年）長月八日／はいかいの連歌  
はや秋の暮る影さす男花かな 碓嶺



以下の乙人との両吟（確嶺自筆）、同年十月の鶯笠・乙人の両吟、同じく鶯笠・乙人らの五吟、同じく太節・乙人・鶯笠らの六吟、文政十一年時雨月下旬の確嶺・乙人の両吟（確嶺自筆）などが含まれる。確嶺らが自派勢力の進出・拡大を狙って、文政九年（二六六）秋頃から北毛に来遊、乙人らと風交を重ねていたことが判明する。

確嶺は中山道坂本宿の産で、中村氏。白雄門の高足長翠が本庄に仮寓していた頃に入門、師の没後は道彦に従う。江戸本町一丁目に先師の小蓑庵を再興し、「小蓑庵再興月並句合」を始める。管見では文政五年（二六三）のものをもっとも早く、参加者の顔触れは『俳山亭文庫書目解説』によれば「圧倒的に東上州が多く」、翌六年五月、催主重斎のものを覗く限り、北毛からの参加はない。年次集に『雨夜集』があり、文政九年（二六六）の初編には

文	音	処
横山町二丁目新道 蕉 雨	本材木町五丁目 太 節	上州沼田上久屋邑 富山屋喜兵衛
大伝馬町二丁目新道 護 物	中橋通一丁目 鶯 笠	上州沼田上久屋邑 枸杞庵乙人
葉研堀不動前 寥 松		

東風ふくや葛西へもどる年始舟  
上毛上久屋乙人  
上毛乙人

ほか沼田連9名が入集し、翌十年の確嶺編『落穂拾』にも、  
花とさす日のあればちる桜哉

ほか沼田連12名が入集、確嶺は北毛地域をその傘下に収めていく。『雨夜集』二・三の両編は筆者未見。四編（文政十二年・二六五）には、再遊して乙人と両吟した「寒いには似た夜もなくて春の月確嶺」以下の歌仙、沼田の東葵らとの五吟、秋塚の完明との両吟各半歌仙を収録、発句も左南更一蕉・旧居更乙童らの沼田連に交じって乙人の息（当時18歳）の句、「昼中や揃ふて歩行春の鳥 笠人」が初出する。以降も彼らの投句は続き、五編ではとくに、「墨水にて／霞けり物の流る、目先より 不仙」以下、乙人・確嶺・三桂・椿海の五吟半歌仙が収められ、文政十三年（二六六）春、乙人が『葛芽』の出版のことで出府した可能性を示唆している。

筆者が入手した旧蔵資料中に、  
文政十三庚寅年十月廿五日／於竹裏園興行

余興／誹諧之連歌

連て来た根風去りぬたびら雪

乙人

以下、休我・政二・完明・嵐古・乙童・笠人・三岳らの懷紙一折（政二自筆）が混入している。松永郁夫氏蔵の句稿に含まれる文政十三年十月十三日付の乙人・政二の両吟（政二自筆）と同月のもので、恐らく政二が乙人の立机を聞き付け来遊したのであろう。政二はもと川越藩士で、玉屑門のち白雄系雨塘門。致仕後俳諧師となり、上総の大多喜や霞ヶ浦辺などを転々とした（政二述、写本『俳道系譜』安政二年・一八五五）。乙人編『都支なミ集』（天保四年・一八三三）には、下総雨塘と政二が並んで収められているので、当時、雨塘の住む蘇我（千葉市中央区蘇我町）の近くに居していたと思われる。政二来遊の目論見は明確でないが再訪の形跡なく、北毛進出には失敗したようである。



文政十三年、47歳の頃、『葛芽』を出版した乙人は、天保二年（二三）から判者活動を開始し、『通紀南民集』を刊行する。立机披露を謳ってないけれども、同集の巻頭には、

歳旦／初て望む天保一天の春

御慶いふふりやたちあふ富士つくば

乙人

などの歳旦・歳暮・春興の三節句を掲げて寿ぎ、2丁目以降は社中月次、「正月分」～「九月分」の高点句（36～55句）を収め、その末尾に「冬の撰は辰年の集に加」えると断る。後半には「定連追加」の発句23章、確嶺・乙人の「両吟」歌仙、乙人・三岳・完明（1句のみ）の三吟歌仙、江戸の鶯笠・確嶺・八朶（夢松）・護物・梅室らと諸国からの文音発句116章、乙人らの一順「枸杞庵時雨会俳諧」（31句）、巻軸が枸杞庵主人の「四時」吟となっている。月次の部分には江戸、足利、前橋の作者が各1名交じるが、大部分は北毛の人々である。『俳山亭文庫書目解説』は本書を天保元年とし、以後、隔年に3冊刊行と記すけれども、天保改元は十二月十日のことなので、翌二年の成立とすべきである。冬の高点分を「辰年（三年）の集」に加入するとしたのは、『松露庵随筆』に做ったもので、月次興行と出版の間にタイムラグが生じるためである。月次の部も每半丁9行で、点数の区別なく収録、年次集とほとんど同じ体裁をとる。既に門人を取り、俳号を授与しているも、乙人の業意識はさほど強くなかったであろう。

なお、その冬、確嶺が来遊、

天保二年卯時雨月中旬興行／誹諧之連歌

雨と降時雨とふるに菊の花

確嶺

以下の半歌仙を三岳と両吟、確嶺の自筆懷紙が旧蔵資料中に混入

する。

翌三年のものは筆者未見だが、『俳山亭文庫書目解説』によれば題簽は「月南美集二編」で、初編と同じく39丁の由。

三編『都支なミ集』もほぼ同じ構成で、月次の部は「正月分」～「十一月分」と「辰年撰」の「十月分」～「十一月分」。連句は乙人・子峰の両吟半歌仙、江戸や諸国の文音句、巻末に「芭蕉忌」として三岳・完明らの沼田連や乙磨（無満）・西馬・可布ら上毛俳家の吟を収める。『俳山亭文庫書目解説』では五年刊とするけれども、辰年の翌年、己の四年刊とすべきであろう。

四編以降の月次集が続刊されたかどうか不明だが、社中の月次句会は当然継続され、筆者が入手した「松茸やしらぬ木の葉のへばり付 翁」を立句とする脇起こしの独吟半歌仙合『附合乙人の選 全』（枳形大本一冊）は、ムラ（上久屋）5名、生品3名、中発知・発知・奈良各2名ほか、催主3名、補助1名の40名足らずが参加（2組応募者も数例）、判者乙人が高点句を奥に書き抜いて署名・捺印、執筆が「天」「地」「人」の勝者名と点数を書き、最後に「開見立会」2名、補助1名（椿岱）、催主3名の名と「天保十五年辰ノ如月十五日」の日付けを記す。点印はクロスする魚（鮎か）2尾を図した山吹色印、「笠科」の朱印、「多胡」の山吹色印、「笠懸野」の山吹色印の4種で、それを組み合わせて点数の刻みを増やしている。化政期と同様、多くは発句の月次句合とセットで催されたものが、勝者（半歌仙合は月雄）が別々だったために単独に伝わったのである。

紙幅の関係で、重要な2点について触れ、本節を終わらせたい。その第一は、息笠人が天保十二年（二四）、30歳の若さで亡く

なり、その三回忌に追善集『もとの垣根』を刊行、手向けたことである。序は天保十三年春、小蓑庵確嶺。跋は翌十四年初冬、護物。巻頭に、

追善俳諧之連歌／病中のすさみ

燈の影の夜明を作る寒かな

笠人居士

以下、乙童・乙人・三岳・春岱ら一巡歌仙（確嶺・鳳朗を含む）、笠人居士の遺章21句、笠人が平生慕っていた道彦・乙二・成美・蕉雨・太節・一茶・八朶・雨塘・碩布・完明ら25名の物故名家の各一章、「草廬日記四時混雜」として鳳朗ら諸国俳家の吟、その間に乙人・椿岱・三岳・嵐古の四吟歌仙、乙人・黒人・綾丸の三吟半歌仙、乙人・月雄・旧居の三吟表六句、乙人・丁々・乙童の三吟ほか表六句3組を収める。後半には、乙人の「笠人詠」と題する中陰の文章と、

俳もさらに炉端の寒かな

乙人

と「一周新盆会」と題する、

拵てと、さまのせん瓜の馬

男六歳礼藏

とのあどけなく、哀切な手向け吟、諸国の詞友から送られた追悼・追善句を収める。

巻軸に靈山赤城山と赤城神社の風土・伝承を賛仰した「赤城賦」の文章を据え、「久呂保山の下流笠科川の辺りに住なせる／乙人述」と署名する。すでに処女選集『葛芽』の叙において、鶯笠がその命名の由来を、「そのかみ黒穂根とそばだちけん、赤城山の裾輪にとなり、あしたにながめ、ゆふべに愛るおもひには、かの万葉集に葛葉がたなどきこへししほりもありてにや」と推察するところで、「久呂保山」は『万葉集』巻十四の東歌、「賀美都家野

久呂保乃祢呂乃 久受葉我多 可奈師家兒良尔 伊夜射可里久母（上つ毛野 久路保の嶺ろの 葛葉がた 愛しけ子らに いや離り来も）に依拠し、最高峰黒松山をもつ赤城山をいう。「笠科川」は武尊山の北、笠ヶ岳に発する川の名で、やがて片品川を流れて片品川と呼ばれ、乙人や甫天喜の郷里である上久屋・椽久保などを経て利根川に合流する。北毛の地にも浸透しつつあった古学（国学）に関心を示したのは一人露彦だけではなく、甫天喜も「久呂保山人」を称し、乙人も愛息の追善集としては異例な一文を載せ、故山への念いを吐露したのである——因みに、北勢多郡久呂保村は、明治二十二年（一八九）になって川額・栃久保・森下の3ヶ村が合併して出来た村名で、明治二十九年利根郡に所属、昭和三十三年（一九五八）、糸之瀬村と合併して消滅、昭和村となった。

今一つは、嘉永三年（一八五〇）、完明の十三回忌追善集『かれ菰しふ』が息春岱により刊行され、乙人が跋を寄せていることである。

完明は宮田氏、名は伝之丞。秋塚村の名主（『諸国俳士録』）。別号を石室、また赫々楨という。巻頭に、「しぐる、や雨なら人のぬれはせじ 完明居士」以下、椿岱・乙人・三岳らの一巡歌仙、石室完明の四季吟各一章、椿岱の手向け吟一章、逸淵・完明の両吟歌仙、京梅室以下の諸国俳家の四季混雜句、逸淵・椿岱の両吟歌仙、乙人・三岳・無名ら地元北毛の社中や詞友、江戸の詞宗の発句などを収める。

序を寄せている可布庵逸淵は武蔵国八幡山の産で、久米氏、また児玉氏とも。完明と同じく白雄系春秋庵碩布の門人である。

### ③三岳と『なみわけ集』

最後に左部家の殿りとして三岳を取り上げる。略系譜に「近江の人春秋庵を師とす」とするのは、筆者入手の旧蔵資料の中に、

「花仙<sup>ハナセン</sup>／松竹も眼を休めけり秋の暮 春秋」以下、三岳との両吟（二十句まで）の句稿が交じっており、年代から見ても恐らくは碩布ではないかと思われる。しかしながら、指導を受けたのは父親の其雲や叔父の乙人と見るのが自然で、強いて外に師をもとめるならば、『俳山亭文庫書目解説』の「小菰庵確嶺門」とする説が妥当であろう。『葛芽』には三岳の入集はなく、文政十三年（一八二〇）の政二来遊時に催した歌仙が初出作品で、当時、33歳、俳歴はさらに数年遡るであろう。乙人編『通紀南民集』（天保二年・一八三一）から本格的に作句、

二月分 とりつかで風の通りぬ土筆原 奈良三岳（ほか3句）  
以下の月次部分に発句9が入集、「枸杞庵時雨会俳諧」の一順に句を付けている。

同じ天保二年の確嶺編『雨夜集』六編には発句1と、

上毛沼田谷川於温泉興行

葭切や鳴にまぎれて聞とめず 三岳

以下を確嶺・文明と三吟した半歌仙が入集、同じ折に確嶺と「十日の巻歌仙」も両吟（『俳山亭文庫書目解説』八三ページ）、さらに初冬中旬には、既述の「雨と降時雨とふるに菊の花 確嶺」以下の半歌仙を両吟している（確嶺自筆懷紙）。

以後、三岳は有力な社中として活動、乙人や鳳朗（鶯笠）評の月次句合や確嶺の年次集『雨夜集』などに句を寄せ、キャリアを

積むに従って北毛俳壇の中核的な存在となっていく。そうした三岳の位置を端的に示すのが次の書簡であろう。

（宛名表書き・封欠）

一筆致啓上候。先以其御地御家内様被成御揃、愈御安泰珍重（破損）儀二奉賀寿候。次、私義、無別条相勤候間、乍憚御安意思召可被下候。扱同屋敷二星要庵北扇与申者、月並ヲ同役ども催仕、無摠頼ミ二付、貴殿御頼申候間、両三まきにても宜敷御座候間、乍御苦勞御世話之程、偏二奉願上候。其代リには、貴殿之名弘メも致べくと存居候間、何卒此度之処、御世話被成下候様、奉願候。右者此段御頼申度、如斯御座候。恐々謹言。

四月十四日

吉沢楽寧記

三岳様

尚く時候折角被成御厭候様、専一ニ奉存候。乍末筆宜敷様被仰上可被下候。先達而は、上之丁磯田屋清七様御死去被成候趣、御書面拝見仕、驚人申候。其節書面差出申べく候処、甚延引ニ相成候段も御序之砌、よろしく被仰上可被下候。先は取込、早々已上。

\*三岳の後妻は磯田屋清七の娘。先妻は天保十一年（一八三〇）の没なので、それ以降、三岳が50〜60歳頃のものであろう。

「貴殿之名弘メ」が立机披露の意味かどうかは別にして、城下の武士間でも三岳の評判が高く、階級の違いも気にしないで、月並みの俳席に招き、連句の捌きを二、三巻ぜひ受けたという切実な声があったことを証する例となっている。

北毛に度々来遊した確嶺は、弘化三年（一八四一）、享年67で亡く

なる。その最晩年に当たる天保十五年（一八四四）十一月分〜弘化三年六月分の『小菰庵月並句合』が河野美術館に蔵され、それを覗くと、寄せられた句数は三千八百余吟〜四千九百余吟で、三岳ら北毛の人々も参加していてよさそうだが、一切出て来ない。選集に句は寄せても、月次句合には加わらなかったのである。

旧蔵資料の中には、乙人の息笠人の「月次」詠草三題二組に加点した一枚が混入する。三岳が笠人の原句を推敲・加点してから転記したもので、推敲した句には「直し」と付記してある。甥の作品だけでなく、他の作者であっても事情は同じであろう。北毛の月次句合の参加者と判者の関係はクールな判者と応募作者の関係にとどまらず、濃密な師弟関係で結ばれていたのである。

嘉永六年（一八三三）、乙人が亡くなり、三岳の竹藁園に参入する若手作者層が殖えるにつれ、自然、印刷物での発表の場をもとめる声が高くなる。それに応えたのが、『なみわけ集』（半紙本一冊）である。

例によって保存状態のよい袋付きで、瓦形の枠内中央に「浪分集」、その左脇に字下げして小さく「上毛 竹藁園撰」と摺る。

東都、機々庵侍中の序によれば、三岳に代わって秋塚の椿岱（完明息）が出版するべく原稿（版下は春岱）を携えて出府、序をもとめられたという——岱中の何者かは未詳——。本文は月次句合の入選句を、正月分〜十月分は31句〜49句、十一月分は18句収録したもので、巻軸に、

梅咲や門から坂になる小家  
行当のなささうに飛螢かな

撰者三岳

の2句を据える。全28丁のシンプルな構成で、二月分のところに

は、

すかし見る接穂に夜の胡蝶かな

催主蒼風

と三岳長男の戸一（図一とも）、後の善兵衛成澄の句が見え、月次句合の催主を勤めたことが判る（輪番制か）。入集者は北毛に限られ、社中の年次集といった趣きである。刊年未詳だが、安政頃（一八五〇〜五三）か。

長命にもかかわらず、三岳の編著は本書のみで、しかも編成を見る限り、諸国俳壇への関心は皆無で、乙人とは対照的である。それは諸俳書への入集状況にも反映し、三岳晩年の入集はほとんど上毛俳書に限られる。その中では香川傳丸編『俳諧三十六友』（安政六年・一八五五）に春岱とともに、肖像画と、

嵩みたる水も濁らず秋の雨

三岳

の賛句が入集、三岳の風貌を偲ぶことが出来、珍重される。

### まとめ

沼田市教育委員会が蒐集した複写によると、高点順に「第七番 景目菓子入、二十六 きせる、三十一 たばこ入、三十八 扇、四十二 将棋駒」（『江雲堂涼水評句合集』）「奉納諏訪大明神」催主龍門村瀧組、年次未詳 などと景品を与える句合が北毛地域にもあったようだが、松露庵や春秋庵系では、始発期のそれと同様、社中指導の手段として催されたもので、その高点句を収録する選集も、安永期以降の『松露庵隨筆』やその追隨書と同じく、一門の錬成のため催され、その成果を年次集として刊行したものと見てよい。不特定多数の作者を対象とした、単発の句合興行

とは、自ずから異質のものであった。

## 注

- (9) 『青裳堂古書目録』(昭和六十二年六月) 掲載品は原題簽「梅野集 完」で、贈呈の付箋が貼られ、左部家旧蔵本である。袋には「牛文庵撰／梅野集／雲石舎露蔭梓」と摺られる。
- (10) 池原鍊昌編『可都里と蟹守』(五味企画、二〇〇四年) 一三七ページ。
- (11) 中村厚子氏のご教示によると、貞享三年(一六八六)の検地帳以来、中町北側に伊兵衛の屋敷があった(『沼田市史 資料編 2 近世』所収「沼田町記 四」、三一〇ページ参照。寛政二年(一七九〇)の「沼田上之町／中町／馬喰町屋敷改名前帳」になると「水帳名前伊兵衛／當時上牧村より出し利兵衛」という記載になり、中町南側にも「当時吾妻原町を参し／藤次郎／伊兵衛後家店屋敷」と記した別の屋敷地もあった。明治七年(一八七四)から同三十九年(一九〇六)までは中町の土地台帳や印鑑簿などの公文書に矢島伊兵衛の名を見出すことが出来る(『中町々誌』平成八年ほか)。なお、矢島家の本家は油屋で、明治末に没落したという。
- (12) 関係俳書に春湖の名は見えず、春路の誤記か。
- (13) 句碑は、現在、昭和村森下の沢浦悟氏宅の庭にある(弘中孝編『石に刻まれた芭蕉』智書房・二〇〇四年、一四二ページ)。
- (14) 無満の追悼集『小六月』(元治元年・一八六四)に、生前親しく風交した十大家の最初に、「夕がほの花のあたりは暮にけ

れ 蓮阿」を挙げる。

- (15) ホームページによると、小千谷市「ふるさとの小さな小さな博物館」展示屏風「陽春の山里」の解説には、外之沢の出身で、本名山田甚六という。
- (16) 梅笑は『狩野譜 諸同家四』の「浜町系図」に「春雪信之二男梅栄知信―梅春旭信―梅笑師信」として見える。宝暦三年(一七五三)から御用を勤め、寛政八年(一八〇六)に御目見え、同十二年に五人扶持、享和二年(一八一二)に屋敷を拝領している。玉湖も梅笑と同じように出府、同派の画技を修めたと推定され、牧之が親交したのも同門の誼よびによるのであろう。
- (17) 左部家旧蔵本に文政七年(一八二四)七月廿五日開巻の『赫々楨撰俳諧句合』(主催沼田秋塚村社中、浜名敏白氏蔵)があり、『上毛古俳家全集』は「赫々楨」を宮田春岱の号とするが、文政四年生まれなので、父親の完明の別号と判断される。大妻女子大学図書館浜田義一郎文庫蔵の文化期月並句合『其日庵』所収。
- (19) 文政十三年(一八三〇)六月、沼田町の片山氏に「車丈」の俳号を与えている(『群馬県史 資料編12 近世4 北毛地域2』(昭和57年)九三四ページ)。
- (20) 乙童は前号、旧居。『上毛古俳家全集』によると、生越村の名主。林氏。幼名仙之助、長じて弥吉。俳諧は碓額門で、乙人、三岳とともに利根郡の三傑と称されたという。元治元年(一八六〇)十月十日没。享年62。
- (21) 「寒月や棒のやうなる人が来」の句で、『一茶全集』第一巻「発句」には未収録。

『上毛古俳家全集』の「宮田春岱」についての解説によれば、俗名は宮田儀左衛門で、「江戸領の御役を勤めて居た関係からしばしば江戸に出向し」というから、その序でに江戸の出版雑務を引き受けたのであろう。

〔付記〕執筆に当たりお世話になった左部別家の正一郎・雅恵・茂各氏と、『沼田市史』近世部会専門委員中村厚子氏、沼田市教育委員会社会教育課文化財保護係など、関係諸機関の各位に深甚の謝意を表します。

（かとうさだひこ 本学名誉教授）